

## 古河電気工業(株) アナリスト・機関投資家向けテレフォンカンファレンス 質疑応答録 (要旨)

日時：2020年11月5日(木) 17:00-18:00

内容：2020年度第2四半期決算

説明者：

代表取締役社長 小林 敬一

代表取締役兼執行役員副社長 グループ変革本部長 荻原 弘之

取締役兼執行役員 財務・グローバルマネジメント本部長 福永 彰宏

Q：光ファイバ・ケーブルの北米市況はQ2も好調ななか、御社の伸びが弱いようだがなぜか？  
また、市場では多心光ケーブルの伸びが高いと聞いているが、古河の製品の状況は？

A：コロナ影響による北米光ケーブル工場の操業低下で顧客の要望に十分応えられないため、他の製造拠点からの供給を行うことによる輸送費や工場でのバックアップ人員増のための人件費が追加発生した。操業低下状態が解消すれば、売上増・コスト低減により改善が見込める。

また、一部の顧客から汎用ファイバの要望があり製品ミックスの悪化を見込んでいる。今後、高機能品の拡販を強化していく。

業界における多心ケーブル自体の定義が難しいところはあるが、当社は400心クラスの市場導入が遅れたことは確か。一方で、超多心と我々が呼んでいる6,912心のケーブルは、プロジェクトものの受注が決まっており、存在感を増している。

Q：米国では政府による地方の通信インフラ需要喚起策が予定されているがその影響は？

A：既に入札も始まっていると聞いているが、当社事業への効果発現は来年度になる見通し。地方のFTTH化投資は当社にとって追い風になる。

Q：ハーネスなどの自動車部品事業は、10-12月に比べて1-3月は改善しそうか？

A：中国の旧正月の影響はあると思うが、他地域でカバーすることで改善する見通し。

Q：情報通信セグメントの年間予想の減益要因は？

A：価格低下は昨年とほぼ同水準の▲5-10%を見込んでおり、年間での影響額は対前年で▲10億円程度とみている。また、一部の顧客と価格交渉中で、下期にさらに数億円のマイナス影響を見込んでいる。また、光ケーブルの生産性改善遅れによるマイナス影響は厳しかった前年と比べて減少も、当初想定との差異は約▲15億円。

Q：光ファイバと光ケーブルの売上比率はどのぐらいか？

A : 4 : 6 程度。

Q : キャッシュ（フリーキャッシュフロー）は想定通り創出されているとのこと。安定配当という方針のなかで、30 円の減配予想とした理由は？また、来期以降の考え方は？

A : 今回、配当予想水準については悩んだが、業績が向上していた現中期計画の初年度である 2016 年度の水準 55 円はしっかり確保することを安定配当と考えた。来年度以降、上積みできるように努力していく。

Q : 北米の光ファイバ・ケーブル、自動車など需要全体が伸びている中で、御社独自の要因でそれを活かしかれていない印象がぬぐえない。その点を会社としてどのように総括しているのか？特に、自動車の代替生産費用、エネルギーインフラにおける新規材料などの要因があったようだが。

A : 2019 年度は外部環境の変化をはねのけるだけの実力が備わっていないことを思い知らされ、さらに今年度は新型コロナウイルスの影響を大きく受けている。ビジョン 2030 達成に向けてハードルが高いのは確か。ただ、2025 年、2030 年と 5G、自動車の電動化が進んでいく社会に向け、進めてきた個々の施策が間違っているとは思っておらず迷いはない。

以上